



名著ヨミトキ： アダム・スミスの「道徳感情論と国富論」

講演：岡本 和久、レポーター：赤堀 薫里

アダム・スミスというと、「昔から市場における個人の利益追求が、社会として一番良くなる」とする強欲翼賛というイメージが先行しているのではないのでしょうか。しかし、これは大きな間違いです。

アダム・スミスが生まれたのは 1723 年、徳川吉宗が享保の改革を行っていた頃です。亡くなったのは 1790 年、徳川家斉の寛政の改革の頃であり、徳川時代の真ん中の時代を生きることになります。大きな時代の流れとしては、経済の主体や原動力が国王や君主から民衆、個人に移りつつある時代でした。王権主義がほころびはじめ、ブルジョワジーが台頭しつつありました。そして時代はイギリスの名誉革命からアメリカの独立、フランス革命へと進行していく過程でした。また、スミスが活躍したのはまさに産業革命の始まるの時期。新技術がどんどん生まれ、いよいよ実用化を迎えようとしていた時期です。

スミスの故郷、スコットランドはスミスが誕生する 16 年前にイングランドと合邦されます。スコットランドは織物業や漁業が中心の地域でしたが、合邦後は畜産や農業が促進され、さらにイングランドの市場や北米植民地との独占的貿易に参加することになり、明るい未来の繁栄が期待されていました。それでも炭鉱夫や製塩業者は農奴のように貧しかったのです。イギリス流の利己主義的な資本主義と、自分たちの伝統的な道徳や価値観とをいかに融合させていくかにみんな何となく不安を感じていました。その点ではグローバル化の波の中でアイデンティティを求めている今日とも似た部分があると思います。



スミスで有名なのは「神の見えざる手」という言葉です。これがスミスの一般的なイメージの基になっています。スミスは、「神の」とは言っておらず、「見えざる手」の語も二大著書である「道徳感情



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

論」と「国富論」に一回ずつ出てくるのみです。しかも、スミスは自由競争とか自然的自由とは言っても、自由放任とは言っていないのです。彼の「国富論」での主張は「市場における個人の利益追求が、結果として資源の適切な配分をもたらし、自然に経済が成長していく」ということです。

スミスの最初の著書、「道徳感情論」は 1759 年に出版されました。道徳感情論の第一篇第一章の出だしの文章は以下のようなものです。

人間というものをどれほど利己的とみなすとしても、なお、その生まれ持った性質の中には他の人のことを心に懸けずにいられない何らかの働きがあり、他人の幸福を目にする快さ以外に何も得るものがなくとも、その人たちの幸福を自分にとってなくてはならないと感じさせる。

しばしば、「アダム・スミス問題」ということが言われます。スミスの二大著書、「道徳感情論」と「国富論」の主張に不一致があるという指摘です。道徳感情論では「行動の規範を共感に帰す」としているのに、国富論では「自己の利益に基づく」とされている。これは相反する主張ではないかというわけです。

スミスの主張は、実は利己心の追及を肯定しつつも、そこに道徳的歯止めをかけていくための方法があり、それによってはじめて我々はこの競争社会をうまく快適に生き抜いていけると主張しているのです。

共感はずべての人が生まれながら持っている質であり、共感により公平な観察者が個人の中に確立され、それが社会秩序をもたらす。共感の範囲が広いほど徳が高い賢人と言えます。一方、世間の評価の元になる判断の基準は狭く短いのです。共感の範囲の狭い軽薄な人が多い。他人に対して共感するという事は、非難を避ける、評価を受け、慈愛を求めるということになります。これにより利己心、野心、虚栄などの感情をうまく飼いならすことになり、よりよく生きる秘訣が道徳であるとしています。

人は世間から評価されることを喜びます。軽薄な人の多い世間は富を持つ人を高く評価します。そして、世間に高く評価されたいという人間の弱さ、利己心が野心・虚栄を生みます。野心・虚栄が富と地位を求めますが、個々人のそのような活動が国の富を大きくするというのがスミスの主張です。

より効率的に経済が発展し、社会に富がいきわたるためには分業と資本蓄積が必要です。その結果、雇用機会が増え、富が貧民にも行きわたるのです。しかし、現実には富が公平に人々に行きわたっているとは言えません。スミスはその原因が政府規制や独占、特権などにあると考えます。それが、スミスが自由競争を標ぼうする理由です。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

人はみな利己心と利他心を持っています。利己心は人間の境遇を改善しようという各人の自然努力、本源的な衝動であり、それが経済成長を生み、より大きな富の源泉となる。それが国民の間に富を行きわたらせることになる。一方、利他心は仁愛です。より大きな範囲の共感が心のうちに生み出す公平な観察者の立場に基づく行動であり、言い換えれば、徳、品格です。賢人は、人間は必要以上の富を持って幸福にはならないことを知っています。うつろいやすい世間からの評価を得たい軽薄な人の行動により貧民が救済されるという主張、そして、徳の高い人は強欲にならず富を分かち合う。これはもしかしたら、やはり慈愛に満ちた「神」が創った見えざる手なのかなと思いました。